

通算 305 回 茅ヶ崎郷土会 史跡文化財めぐり

茅ヶ崎市内の大山道を歩く③

(円蔵・西久保地区)

茅ヶ崎駅よりバスで円蔵地区まで行き、懐島景能館跡と言われる神明大神から周辺を歩きます。その後西久保地区をめぐり、大山道に出れば徳利ひろばに行きます。

日時 令和5年7月8日(土)

(事前の勉強会は同年6月13日(火) 13:30～ 市立図書館第一会議室)

集合 茅ヶ崎駅改札前 8時50分まで。終了は12時30分頃の予定

行程 茅ヶ崎駅—(バス)—バス停「円蔵」—(徒歩)—①神明大神—②山王社(道祖神・和合神の碑と鶴田栄太郎)—③輪光寺—④了覚庵跡—⑤北向き地蔵—⑥宝生寺(善光寺式阿弥陀三尊)—⑦日吉神社—⑧かっぱ徳利ひろば—バス停「変電所前」—茅ヶ崎駅 (バス停「変電所前」の茅ヶ崎駅行きは12:17あるいは12:47発)



連絡先 山本俊雄 090-6174-2806 尾高忠昭 090-3241-0775 平野文明 090-8173-8845

次回史跡・文化財めぐり 第306回綾瀬市の早川城址などを訪ねる

事前勉強会 9月12日(火)午後 市立図書館 探訪 10月14日(土)綾瀬市早川

はじめに

令和5年の5月8日をもってコロナは第5類となりインフルエンザ並の扱いとなりました。茅ヶ崎郷土会では史跡めぐりも原則会員限定で小規模に行ってきましたが、今回より通常通りの一般参加者大歓迎で行いたいと思います。今年度も市内2か所、市外2か所を予定していますが、第1回目は前年に続き「市内の大山道を歩く③」として、市内懐島周辺から大山道に出るコースをめぐります。茅ヶ崎駅前からバスで停留所「円蔵」まで行き、円蔵・西久保の懐島周辺と大山道を訪ねます。

① 神明大神（懐島景能の館跡） 円蔵 2282 字御屋敷

茅ヶ崎中央通りの円蔵バス停から東北に約200mの所に円蔵の鎮守である神明大神があります。大庭（懐島）景能の館はこの神社の辺り一帯と伝えられています。『新編相模国風土記稿』の円蔵村の項に「景能館跡…村の西方にあり、広さ七千坪（2,3ヘクタール余り）」とあります。住宅が増えて昔の様子はなくなりましたが、神社のそばの畑に空堀の跡という窪地が最近まで見られました。神社境内の裏手には、景能とされる石像などが建っています。（『ぶらり散歩郷土再発見』）

② 山王社（道祖神と鶴田栄太郎の和合神の句碑） 円蔵 2228

神明大神から南側にぐるりと回って山王社に行きます。境内には、木箱に収めた阿夫利神社と大山寺の御札が立ててあります。

以前は道を挟んでその東に双体道祖神（安永5年：1776）と「春や春岐路に立てども和合神」という鶴田栄太郎の句碑（昭和54年：1979）が並んでいました。それらは今は境内に移されました。鶴田栄太郎（昭和43年没）は円蔵の生まれで郷土史家、俳人として知られています。茅ヶ崎郷土会設立者の一人です。また多くの郷土史の著書を残しています。

③ 天慶山地蔵院輪光寺 円蔵 2238

山王社から北に歩くと、室町時代初期の創建と伝えられる真言宗の輪光寺があります。本尊の木造地藏菩薩立像は、江戸時代には大山街道沿いの鷺茶屋で大山尊者相手の出開帳がなされていたといわれています。

山門を入れて左手に、市重要文化財指定（昭和44年：1969）の庚申塔があります。寛永17年（1640）の銘があり、市内最古のものです。全国的に見ても、「みザル・きかザル・いわザル」の三猿形式庚申塔では最古とも位置付けられています。

銘は「當六具供養勸功德伴成仏」「相州宅良郡円像人殺嶋村天口岩戸久右衛門」と読めて、疑問の残る庚申塔です。

本堂脇には飯田九一の「うたかたを川の精霊（すだま）に獺祭（うそ・おそ？まつり）」の句碑（昭和42年：1967）があり、この裏面は「河童徳利の碑」になっています。

④ 輪光寺墓地（円蔵村地頭の横山氏墓碑）と

了覚庵阿弥陀堂跡（地頭太田氏墓碑） 円蔵 2178 辺り

輪光寺の山門前を北に向かうとすぐにT字路になり、その東側にある輪光寺墓地に、江戸時代の円蔵村の領主の一人横山氏の墓碑があります。また、道を挟んだその筋向こうの了覚庵跡の境内にはもう一人の領主、太田氏の墓碑があります。

太田氏の墓碑の周りには、了覚庵の代々の庵主だったと思われる供養塔が集めてあります。その中に「行者了察」が浅草観音と大山不動尊を三十三度登拝した、寛政7年(1795)銘の記念の石塔があります。また弘化4年に没した「法師了学」の句碑「嶋立つやはや須磨寺の夕念仏」があります。

西に進んで、丸子中山茅ヶ崎線（茅ヶ崎中央通り）の大きな通りを渡って西久保を目指します。

⑤ 北向き地蔵 西久保 572 路傍

宝生寺のそばの旧道の分かれ道に北向き地蔵と呼ばれる石造地蔵菩薩坐像（文久2年:1862 銘）と道祖神2基（安永年銘の双体像と明治32年銘の文字塔）、さらに、万延元年(1860)銘と明治32年銘の庚申塔があります。庚申塔と北向き地蔵は道しるべを兼ねていて、地蔵には次の文字があります。

竿石右側面 文久二戌年(1862)十一月二十一日再建

同 正面 種子（カ）右子権現／北一之宮／左南湖

同 左側面 相州高座郡西久保村／念佛講中

基礎石には22人の念仏講中の名前があります。宝生寺の山門脇にある無銘の地蔵坐像が北向き地蔵の前身と言われています。

⑥ 懐島山宝生寺 真言宗 西久保 546

本尊は江戸時代の大日如来です。また、境内のお堂に、昭和34年(1959)に国の重要文化財に指定された善光寺様式の銅造阿弥陀三尊立像が祭ってあります。中尊の阿弥陀如来の右脇侍に勢至菩薩、左脇侍に観音菩薩の一光三尊式（一つの光背に三尊仏が並ぶ）で、長野県の善光寺の本尊の形式と言われています。年号の銘はありませんが、鎌倉時代後半期の造立と考えられています。（『ぶらり散歩郷土再発見』）

善光寺式阿弥陀三尊の特徴

①一光三尊

②阿弥陀如来の左手は刀印（下げた左手の人差し指と中指を伸ばし、他の指を曲げる）で、両脇侍は胸の前で両手を重ね、独特の宝冠をかぶる。

他の同様式の阿弥陀三尊の例

①茅ヶ崎市堤浄見寺旧三橋家住宅敷地 石造善光寺式阿弥陀三尊像 文化6年(1809)銘

②海老名市門沢橋正覚院 木造善光寺式阿弥陀三尊像 年銘は不明。

③兵庫県丹波篠山市今田町小野原の和田寺境内 天保十年 (平野会員 2012 年に訪ねる)

④鎌倉市円覚寺の像は文永 8 年 (1271 年) 銘で国指定の重要文化財。

『ちがさき村ごと歴史散歩』には、「宝生寺については天保年間(1830～44)の火災で焼失したために古いことが分からない」と記されています。阿弥陀三尊像も火災のあとを残していることからこの時のことかもしれません。また、『ちがさき歴史の散歩道』では、「ことに勢至菩薩は火災のために反身になっていて痛々しい。」と書かれています。この阿弥陀三尊像はかつては秘仏とされていて、今は毎年 4 月 29 日に公開されていますが、7 月の探訪時にはご開帳をお願いしてあります。

⑦ 日吉神社 西久保 466

北向き地蔵の道辻を北へ進むと、西久保の鎮守、日吉神社があります。社殿の脇には市内でただ一つの大山道標が残っています。この道標は、神社の北方約 400m を通る大山道の辻にありましたが、道路の拡幅工事で現在の場所に移されたものです。この道標の銘は「右大…」とだけしか読めません。右に行けば大山なら、大山道の南側に、北面して立っていたこととなります。昔、日吉神社前の道は、北に伸びて、昔話「カップ德利」で有名な大曲橋のたもとで大山道と交わっていました。

道標のほかに、境内には道祖神と庚申塔があります。

①道祖神 寛政 6 年(1794)角柱文字等

向かって右側面に「如是尊勅 寛政六甲寅／正月吉 []」／「南無妙法蓮華経 []」／「當具奉行 世話人 []」、

正面に「道祖神」、

向かって左側面に「氏子中」とあり、基礎に講中 7 人の名前があります。

②板碑型の庚申塔 延宝 8 年(1680) 三猿 文字

⑧ かつぱ德利ひろば 大曲橋のたもと 西久保 1649 番地 1

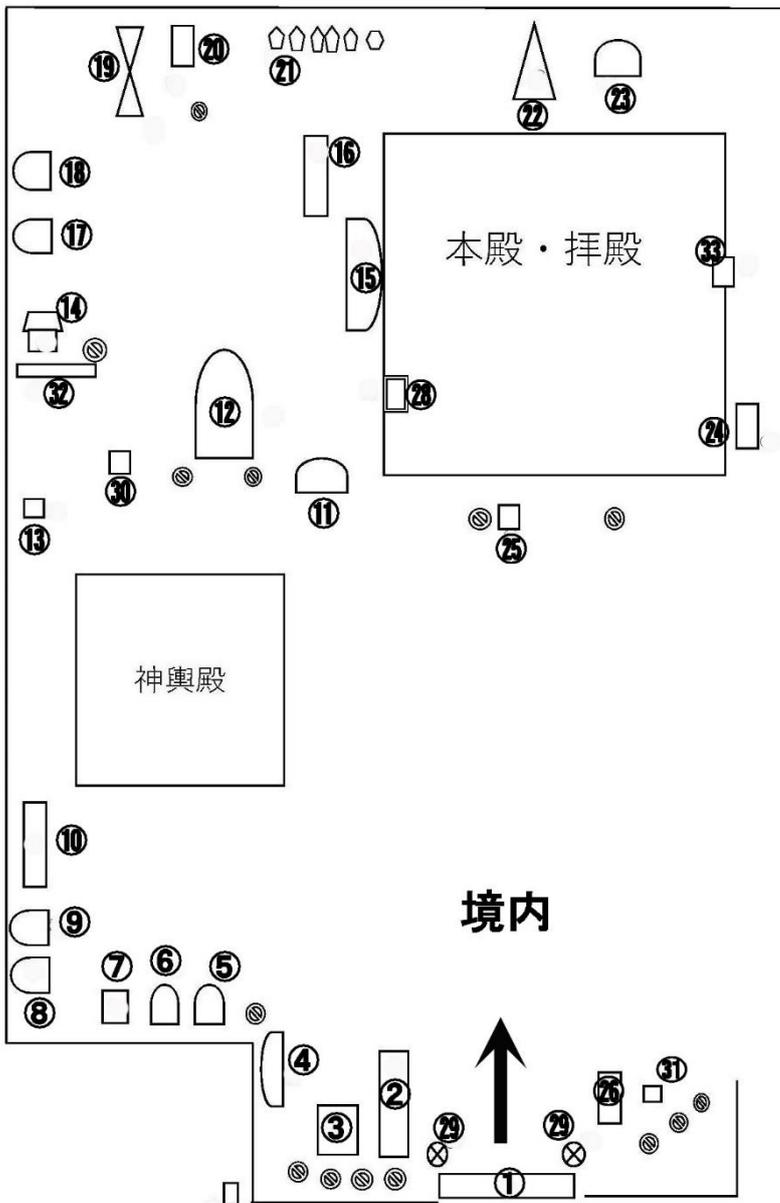
大山道は、茅ヶ崎と寒川との境の小出川に架かる大曲橋を渡って西に延びています。この橋は古くは間門橋と呼ばれ、その付近の小出川は間門川と呼ばれていました。ここに伝わる河童德利の話は、江戸時代に広まりました。それは大山参りの通行人に、德利を見世物としてお金を取って見せたからで、その話は江戸にまで伝わり、当時の出版物『宝暦現来集』に収録されました。その話の筋書きと、現在、当地に広まっている話とは、多少の違いがあります。現在のものは、昭和初年、鶴嶺小学校が郷土研究の際に、河童德利と題する紙芝居を作成し脚本は佐藤萬吉校長、絵は小塚源一郎訓導が描き、普及したものです。助けられた河童が礼に置いていった酒を思う存分楽しんだ主人公の五郎兵衛が、ふと働くことを忘れていたことに気付き、德利の尻をたたけば酒が出なくなるという河童のことばに従って酒を断ち、働きだしたという筋書きです。現在、新湘南国道の歩道橋は五郎兵衛橋と名付けら

れています。また、円蔵の輪光寺境内には、昭和42年に河童徳利の碑が建てられ、碑の裏面に徳利の所在の変転が記されています。それによれば、徳利は、子孫にあたる静岡の親戚にあるとのこと。河童徳利の話は、『かながわのむかしばなし五〇選』にも選ばれています。(『ちがさき歴史の散歩道』)

以上の8ヶ所をめぐり、今回の3回目の「市内の大山道を歩く」を終わります。

(山本俊雄)

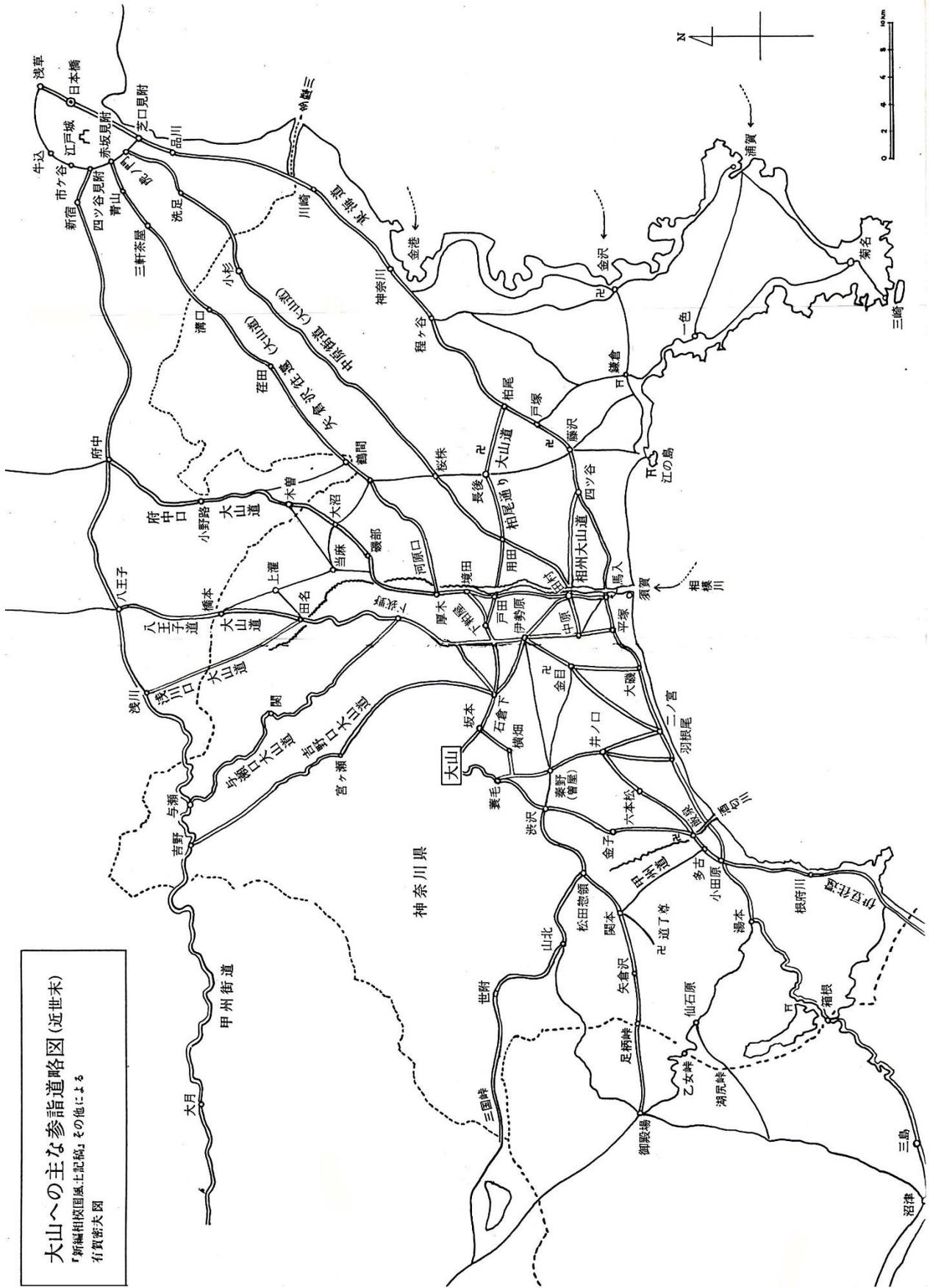
円蔵 神明大神宮 石造物配置図



番号	石造物	造立年
①	神明大神宮大鳥居	S45
②	懐島郷円蔵鎮座 神明大神宮(社号碑)	H13
③	浜降祭今昔 懐島郷発祥の地	H22
④	神明大神宮社誌	H13
⑤	円蔵祭囃子の由来	S55
⑥	円蔵神明大神宮	S37
⑦	道祖神	安永7
⑧	神輿九拾年祭	H21
⑨	大神輿百参拾年祭	H22
⑩	円蔵神明大神宮境内整備工事奉納者名	H22
⑪	景能祭(没795年)	H17
⑫	慰霊碑(戦没者)	S48
⑬	懐島館墓址	H13
⑭	山王権現石祠	元禄14
⑮	懐島平権守景能年譜	H14
⑯	懐島館趾	H15
⑰	懐島平権守景能公没八百年祭	H22
⑱	源頼朝奥州征伐につき景能に意見を聞く	H14
⑲	懐島平権守景能公 像	H14
⑳	大庭景能入道霊	T15
㉑	五輪塔他	
㉒	五重層塔(供養塔)	H15
㉓	顕彰碑(景能、景兼)	H15
㉔	旧石橋	
㉕	がん封じ	H19
㉖	手洗い石	S57
㉗	いちよう(昭和3年植樹碑)	H15
㉘	懐島館出土礎石	
㉙	狛犬	H13
㉚	手洗い石(潔渭水)	M10
㉛	旧鐘楼礎石	
㉜	鳥居	
㉝	山王権現石祠	

大山への主な参詣道略図(近世末)

『新編相模国風土記稿』その他による
有賀密夫図



をあかし、それより一滴も出でず。おしき事なり。

今に五郎左衛門方の什器とせり。参りて尋ねれば見せける。かの彫物師猪之助、銀座御役所秋田氏にて出会いし時、余は故実を聞くを好み、見たるまま語り聞かせける故、直ぐさま写しおくなり。

〈引用・参考資料〉

- 『大山街道舌栗毛』あしかび叢書二篇 鶴田栄太郎著 昭和三十四年 自刊
- 『新編相模国風土記稿』三卷 雄山閣版
- 『茅ヶ崎市史』一、三、五
- 『茅ヶ崎の石仏―鶴嶺地区』資料館叢書一三 平成二十七年文化資料館刊

(平野文明)

くられるようになった。これらの模造を善光寺式三尊と呼ぶのである。

この三尊像の原型であるはずの信濃・善光寺の本尊像は嚴重な秘仏として、その形骸すらうかがうことができないが、その模造を集約して考えると、かつて法隆寺に伝来し、現在東京国立博物館に収められている、いわゆる四十八体仏と喚ばれる小金銅仏群のうちの一つ、一光三尊仏立像にたいへんよく似通っていることがわかる。この一光三尊像は飛鳥時代の作例と考えられるもので、善光寺の本尊が仏法最初の像であるかどうかはともかく、寺伝のとおりならこうした古像であったものだろう。

さてこの宝生寺像は全体によく均斉がとれ、衣文の表現もまたなかなか巧みなものといえることができよう。そのやや細身の体軀、通肩の衣の胸をわりに大きくあけ、衣の折り返しを内衣のようにのぞかせる衣の形や、繁く細かくとった衣文の表現法、全身に形式化のうらみはあるが、よく整齊された表現などは数多い善光寺式三尊像うちでも、鎌倉時代後半期のものと思われる埼玉・永明寺の三尊、延慶二年（一三〇九）銘の千葉・円光寺三尊、同・修徳院の正応三年（一二九〇）銘の三尊などに近い特色を持っており制作の時期もそれに近い十三世紀末ごろとみてよいであろう。

ちなみに神奈川県下の善光寺式三尊としては、前記円覚寺像のほか未指定のものとして横浜市・千手院の阿弥陀如来立像（文永三年（一二六六）出羽国でつくられた旨の銘文を持つ）ので、中尊のみのこり、脇侍の一体観音は現在千葉県清澄寺

に蔵されている）、同・龍華院の三尊、大井町の西明寺の三尊像、小田原市の蓮上院の脇侍一体、葉山町・新善光寺の元禄九年（一六九六）の作になる三尊と、だいたい同時期の作と思われる木製の三尊像などが知られている。

⑦日吉神社

● 狛犬（左右の像の基壇に） 昭和十六年（一九四一）八月／茅ヶ崎茶屋町 岩澤利一

⑧かっぱとつくり広場

『宝暦現来集』所収（山田桂翁著 天保二年・一八三一刊 茅ヶ崎市史三一五八七頁）

天保二年卯年四月、本所に住す彫物師猪之助と申す男、大山へ参詣のみぎり、同所間門村百姓、三輪堀五郎左衛門（ママ）方へ立寄り、左の陶（注 文中にスズキ二尾と徳利の挿絵がある）の訳聞き候よし写し来る。この訳聞きしに、同所、相州大山道西久保と申す所、小さき川あり。その川にて河童、馬を引き込む所を、大勢にてこの河童を打殺さんとせしを、同所、間門村百姓三輪堀五郎左衛門と申す男、河童を貰い助ける。その夜、河童礼に来る。右の陶へ酒を入れ、スズキ二本そえて来る。鎌倉時代の比なりと。

およそ六百年を過し事なり。この河童雄雌にて、一疋は鎌倉に住す。一疋は間門川に住して、折々文通をせしとの事、彼の河童いわく、この焼物の酒、飲みたる時、少しづつ残し置けば、万年も絶ゆることなしと言えり。その意を知らざる者、残らず酒

夫氏。
銅造阿弥陀三尊像

中尊の阿弥陀如来像は、右手を挙げて掌をみせ、左手は垂下して、第二・三指を伸ばし、他の三指を折って握るといふ、善光寺如来像の約束どおりの、印を結んでいる。技法的には頭頂から足柄（あしほぞ）までを、両手首を除いて一鑄としていゝる。上方に挙げた右手首は横内側へ抜けるようなアリ柄によつて着装し、左の手首も同様にアリ柄であわせるようになっていゝるが、現在、当所の手首は失われており、後補の手首を蠟付けしてある。額の中央の水晶製の白毫と、同様に水晶珠とは、いづれも後補のものかと思われる。現在、当初の台座が失われ、木製の台座を補っているためであるが、両足の柄を短くやすりとつていゝる。肉厚はだいたい五ミリメートルでいどと思われゝるが、背面中央部にはスが多くみられ、この部分には鑄造のさゝいの欠を補うための鑄かけが数カ所にわたつてみられる。中子の土は頭頂まできれいにさらつていゝる。また背面には光背を止めるための柄をつくりだしてゝいゝるが、光背は現在失われていゝる。

左脇侍の観世音菩薩立像は頂から足柄まで、両肩から先を除いて一鑄とし、両肩部にアリ柄をつくつて、両腕を装着する。善光寺式三尊の脇侍の場合、この形式は非常に多く、なかには両腕をあわせて一鑄としたものを片に嵌め込む形式のものもあるが、この像では左右の腕を別々につくり、嵌め込む形をとつてゝいゝる。この像は頭上に六角形の冠を頂き、円覚寺像にみられゝたような前立式の冠ではない。この宝冠は正面に立像の化仏を

刻出し、他の部分はナナコ地に華文を刻んでゝいゝる。額には中損と同様水晶製の白毫を陥入してゝいゝるが、これも後補のものである。

像の側面、耳後ろあたりと脇下に左右ともに鑄造の際に筭（こうがい）をとおしたかと思われゝる小さな穴が認められゝる。（こうがい）をとおしたかと思われゝる小さな穴が認められゝる。右脇侍の勢至菩薩立像は、構造などほとんど観音像と同様であるが、宝冠の正面には水瓶を陽刻してゝおり、他の区の様は観音像と同様である。宝冠に囲まれた頂きの部分は勢至像では宝髻毛筋をあらわしてゝいゝるが、観音像にはこれが認められゝず、平滑にしてあるのみである。

三尊とも火災に遭つてゝおり、そのためにほとんどメッキが痕跡のみになつてゝいゝるが、勢至像の被害がもつとも大きく、下半身の肌がだいぶいたんで、上半身、下方から三分の一ほどのところから上は後ろに反りかえつてゝいゝるのは痛ましい。また背面腰のあたりに、やはり焼損のためかと思われゝる穴があり、現在こくそのようなもので埋められゝてゝいゝる。さらに右足先を失い、足柄は両方とも失われてゝいゝる。台座は両脇侍とも中損のものと同寺の木製の台座が後補されてゝいゝる。

こうした三尊像が善光寺式の名を冠してよばれるのは、『扶桑略記』に「同年（欽明十三年）壬申十月、百濟齊明王献阿弥陀仏像（長一尺五寸）観音像 勢至（長一尺）善光寺縁起仏云」とあるように、百濟から送られた仏法最初の像が蘇我・物部両氏による崇仏廃仏の争いの結果、難波の堀江に捨てられゝたものを、信濃に持ち帰り、草庵を営んだのが、現在の善光寺の起りだとする伝説となり、鎌倉時代に入つて多くの模造がつ

(裏銘) 弘化四年丁未年(一七四七) 四月二日/行年七十四歳
輪光寺の過去帳に「了学法師、伊勢国産当所阿弥陀堂にて寂
す、通名瓦石と言う、当寺にて引導、現住明恵代」(山口金次資
料) と塩原著『茅ヶ崎の記念碑』六一頁にある。
● 両学庵跡と道を距てた共同墓地に、円蔵の領主の一人、横山
氏の古い墓石がある。

○西久保村『新編相模国風土記稿』三二―二八八頁 雄山閣版

〈爾之久保牟良〉 元禄国図に円蔵村枝郷、古は本社村と号す
〈正保の改には本社村と記す〉。家数四十九、江戸の行程十五里。
昔は懷鳴郷に属す。東西五町ばかり南北七町ばかり(東 円蔵
村、西 萩園村、南 浜之郷村、北 香川村)。御料及び堀三五
郎・丸山斧吉・石川與次右衛門・細井頭次郎・細井佐次右衛門勝
延等が知行なり。

○高札場三。○小名 加賀屋鋪、△間門仲町(萬可止奈加天宇)、
△横町、△下町(之毛天宇)、△馬場。
○懷島山(共音) 大山道の傍にあり。山とは称すれど、たゞ、松
四五株立る小丘なり。塚二、大山道の傍にあり。○赤池川 西方
萩園村境を流る(幅二間ばかり)。

○宝生寺 懷島山と号す。古義真言宗(茅崎(ママ)村円蔵寺末)。
天明二年再建す、本尊大日を安置す。○妙運寺 法性山と号す。
法華宗(鎌倉本覚寺末)。相伝う、昔、近藤右衛門尉経秀の別業
にて其母隱栖の地なり。本覚寺第五世蓮光院日慶に帰依し、天
文十四年法性院妙運日如の逆修号を授与せられ、宅を捨て寺と
し、日慶を以て開山とす(妙運尼天文十七年九月二日卒)。本尊

三宝祖師を安ず。△七面堂。

(注記)

元禄国図 江戸幕府の命で、慶長・正保・元禄・天保の四回、全
国規模で国ごとの絵図等が作成されました。このうち元禄国図
は、元禄九年(一六九六)その作成が命じられ、同十五年(一
七〇二)までにはほぼ全国の分が完成したといわれています。一
里を六寸とする縮尺(約二万一千六〇〇分の一)で、山、川、道路
等が描かれ、街道を挟む形で描かれている黒丸は一里塚の表示
です。(国立公文書館デジタルアーカイブス)
● 天明二年(一七八二) ・天文十四年(一五四五) ・天文十
七年(一五四九)

⑤北向き地蔵 西久保五七二路傍

(竿石) (右側面) 文久二(一八六二) 戊辰十一月二十一日再
建 / (正面) 種子(カ) 地蔵菩薩 右子権現 / 北一之宮 / 左南
湖 / 道 / (左側面) 相州高座郡西久保村念仏講中
(基礎) 二二人の名前
● 宝生寺境内に、この北向き地蔵の初代のもの竿石と思われ
るものがある。

(右側面) 宝曆七(一七五七) 丁丑歳十一月十一日 地蔵講中
 / (正面) 種子(カ) 地蔵菩薩 右子之権現道 / 左南湖

⑥真言宗 懷島山宝生寺 西久保五四六

● 善光寺式 銅造阿弥陀三尊立像について 『茅ヶ崎市史』 3
考古民俗編 二二―一頁にある解説を次に転載。筆者は佐藤昭

②山王社

円蔵2228

●鶴田栄太郎和合神の句碑

(銘)春や春岐路にたてとも和合神 あしかび

(裏面)昭和五十四年(一九七九)七月建立 茅ヶ崎郷土会

昭和二十七年(一九五二)四月十日、飯田九一を案内して行わ

れた大山古道吟行の際、下赤羽根の薬師堂近くの双体道祖神を訪ねたときの一句のようである。(飯田九一編『大山古道を探る』)

その後、郷土会の手でこの地に建てられたもので、筆跡は妻の桃代である。ちなみに飯田の句は「道のべの神も春なれ手をとつ」と(塩原富男著資料館叢書10『茅ヶ崎の記念碑』五九頁)

●双体道祖神

(銘)安永五申天／(道祖神双体像)／十二月吉日

③真言宗

天慶山地蔵院輪光寺

円蔵二二三八

●輪光寺の本尊 地蔵菩薩が鷺茶屋のほとりに出開帳(鶴田栄太郎『大山街道舌栗毛』上巻 七〇～七二頁)

夏山をとおして毎年、円蔵の輪光寺の本尊 地蔵尊が鷺茶屋

のほとりに出開帳した。高座郡札所二十四番の霊場で、ご詠歌

は「むつりの光を杖にむつのみち迷わで西の空に行かまし」

●導師は盛んにお参りして過ぎる。三年だか四年だかの間のお

賽銭で本堂の再建がなつたという話を円蔵の小室幸治さんが祖

父から聞いたときかしてくれた。本堂が震災で倒壊後仮堂だつ

たのを復興事業を起こすことになった。そのスタートを飾って

やろうと、大山街道春のレクリエーション(市主催 あしかび

東導講話)、県下各地から大勢参加するので好機逸すべから

ず、昔に返つて出開帳を関住職にすすめた。昭和二十七年三月十六日に決行。鍛冶屋小山作二郎(小山鉄工所)の母屋で行つたが盛大であつた。これがきつかけとなつて本堂落慶に一步でも前進したら、私の興業も単なるお祭り騒ぎに終わつたといわれまい。本堂は昭和三十一年にめでたく落成入仏式が済んだ。

●寛永十七年銘の庚申塔

(銘)當六具供養勸功德伴成佛 寛永拾七年(二六四〇)／(種子 三字 三猿)／五月吉日 相州宅良郡圓像人殺嶋村天口岩戸久右衛門

昭和四十四年市重要文化財指定

●元文四年(一七三九)の庚申塔、弘化四年(二八四七)の二十三夜塔、六地蔵など

●飯田九一 かっぱどつくりの句碑

(銘)うたかたを 川の精霊(すだま)に 瀬祭

裏面に、静岡県千頭に行つていた河童徳利を昭和四十二年に茅ヶ崎に戻ってきた記念に建てられたことが刻されている。

④了覚庵阿弥陀堂

円蔵二二七四

●了覚庵は円蔵村の領主の大田家五代、吉次の菩提のために建てられた『風土記稿』にある。「了学」は吉次の諡(おくりな)。

今は輪光寺で管理されている。

(銘)太田善太夫吉次之墓

●法師了学の句碑

(銘)鳴立つやはや 須磨寺の夕念仏

に非るか。この時召し下さるべきやと。てへれば、仰せに曰く、件の男は斬罪に行はるべき由、下知しおはんぬ。今に現存、奇異の事なり。然れども、神事に優じ早く召し進ずべし。但し指したる堪能に非ずんば重ねて罪科に処すべし。てへれば、則ち義秀を招きこの旨を召し仰せらるるの間、これを射おはんぬ。

九六 建久元年（一一九〇）十月三日（市史1 九四頁）

頼朝は後白河法皇との会談のため、この日鎌倉を発った。夕暮れに懷島の景義の館で景義がもてなした。

甲申、進発せしめ給う（中略）その後御首途したまふ、冬天程なく、黄昏に臨むの間、相模国懷嶋に宿せしめたまふ、後陣の輩はいまだ鎌倉を出でずと云々、大庭平太景義、御駄餉（ごたしょう・ごたこう）を儲く

九七 建久二年（一一九一）八月一日（市史1 九四頁）

頼朝は七月二十八日新亭に入った。景義は新亭に酒を献じた。其の時保元の乱の武勇伝を語った。

丁丑 雨降る。終日休止せず。今日、大庭平太景能、新造の御亭において、盃酒を献ず。その儀、強ち美を極めず、五色の鱸魚などをもつて肴物となす。足利上総介、（中略）佐々木佐三郎などその座に候す。勸盃（けんぱい）の間、仰せによつておのおの往事を語り申す。

景能は保元合戦のことを語る。この間申して云く、勇士の用意すべきものは武具なり。なかんづく縮め用ゆべきものは弓箭の寸尺なり。鎮西八郎は吾が朝 無双の弓矢の達人なり。然れども、弓箭の寸法を案ずるに、その涯分に過ぎたるか。そ

の故は、大炊御門（おおいみかど）の河原において、景能、八男が弓手に逢ふ。八男、弓を引かんと欲す。景能、潜（ひそか）におもえらく、貴客（きかく）は鎮西より出でたまうの間、騎馬の時、弓 聊（いささか）心に任せざるか。景能は東国において能く馬に馴るるなり、者ればすなわち八男が妻手（めて 馬手）に馳せ回るの時、絆（こと）相違し、弓の下を越ゆるに及んで、身の中（あた）るべきの矢、膝に中りおわんぬ。この故実を存ぜずんば、忽ちに命を失うべきか。勇士は、只 騎馬に達すべき事なり。壮士など耳の底に留むべし。老翁の説、嘲哂することなかれと云々。当座皆甘心す。また御感の仰せを蒙ると云々。

☆保元の乱 崇徳上皇（源為朝などの戦が得意な武士が付く）
対 後白河天皇（平清盛、源義朝：懷嶋景能らが付く）

九九 建久四年（一一九三）八月二十四日（市史1 九七頁）

景義は平素望んでいた出家を遂げた。

一〇三 建久六年（一一九五）二月九日（市史1 一〇〇頁）

景義は偽刑によつて鎌倉を追放されていた。申状を捧げて身の潔白を訴えた。その結果景義は許され、頼朝が東大寺再建の供養に出向くときの供奉人に加えられた。

正治元年（一一九二）正月十三日（市史1 一〇二頁）

頼朝死去 五三歳

一一九 承元四年（一二二〇）四月九日（市史1 一〇四頁）

丙寅、懷嶋平權守景能入道於相模國卒

・寛永七年（一六三〇） ・応永二年（一三九五） ・延宝八年（一六八〇）

・宝永庚寅七年（一七一〇） ・建久六年（一一九五）

・枉歴（おうれき） 無実の罪に伏していた期間

・厚免 特別の恩赦

・建仁元年（一一〇一） ・承元四年（一一二一〇） 四月九日

○鷺茶屋（鶴田栄太郎『大山街道舌栗毛』上巻 六七〇頁）

鷺茶屋というのは小出県道からこの先の円蔵分にあった。円蔵生まれで平塚在住の小山秀次さんのひい爺さんかもっと前の人が出した店で、焼き物の鷺が土間の湯沸かしの辺にあつて、誰いうと無くその名で通り……。名物は「麦とろろ」と「どじょう汁」であつた。その跡にこの間まで床屋がいたが、今は高田新道へ出て空き地となつた。

古老談によれば高度鋼の工場の裏手に大きな松山があつて、それが鷺山だつたようだ。

焼物の鷺は明治の初年まで店に飾つてあつたが、四谷の古道具屋が買ったとのこと。当時使用の皿小鉢の一部分は平塚に移つた小山家に長き眠りを眠っている。

①神明大神

・吾妻鏡に記されている懐島景義

五八（『茅ヶ崎市史』1の資料番号）

治承四年（一一八九）十月二十三日（市史1七七頁）

壬寅、相模国の国府に着き給う。はじめて勲功の賞を行はる。

北條殿及び信義（武田）、義定（安田）（中略）景能、（中略）家義（飯田）以下、或は本領を安堵し、或は新恩に浴せしむ。

（中略）大庭三郎景親、遂にもつて降人となりて、この所に参ず、すなはち、上総権介広常に召し預けらる。（中略）川村三郎義秀は川村郷を収公せられ景能に預けらる。（中略）このほか石橋合戦の余党数輩有りといえども刑法に及ぶの者、わずかに十が一つかと云々。

七二 養和二年（一一八二）四月二十四日（市史1八三頁）

鶴岡若宮付近の水田三町余りが池に改められ、景義これを奉行する。

七三 寿永元年（一一八二）八月十二日（市史1八三頁）

この日、頼家誕生。鳴弦の儀を景義が勤めた。

御台所、男子御平産也、御験者専光房阿闍梨良暹（せんこうばうあじやりりょうせん） 大法師觀修、鳴弦役、師岳兵衛尉重

経 大庭平太景義 多々良権守貞義也

七八 元暦元年（一一八四）八月二十八日（市史1八五頁）

八月二十四日、頼朝は公文所を開設した。二十八日門を立てた。大江広元や三善康信などが参集した。景義は彼らの接待役を務め、酒をふるまつた。

九三 建久元年（一一九〇）八月十六日（市史1九二頁）

馬場の儀なり。（中略）ここに流鏑馬の射手、一兩人、期に臨んで障あり。すでに欠如に及ぶ。時に、景能申して云く、去んぬる治承四年に、景親に与する所の川村三郎義秀、囚人として景能これを預かりおく。弓馬の芸に達するなり。且つは彼の時与党、大略厚免に預かりおはんぬ。義秀独り沈淪すべき

○**円蔵村**『新編相模国風土記稿』三一一八七頁 雄山閣版

〔恵牟左宇牟良〕 江戸より行程十五里半（勝福寺記に據ば懐鳴郷の内なり）。天正年中の開墾と語り伝うれど、村内古跡あるによらば古く開けしなるべし〔正保の改めには本円蔵村と記す〕。家数六十五、東西十町ばかり南北二十町（南 茅島（ママ）牟良、北 香川村、東 高田村、西 西久保村） 地頭太田善太夫吉次・辻忠兵衛（辻氏の先祖太郎助久吉、後忠兵衛と改め、善太夫の祖 善太夫吉正二人、慶長五年、上田城攻の時戦功ありて、二人御加増を賜る由家譜に見ゆ。按ずるに、加恩地所を記さずといえども同時拝賜する時は、当村なる事知るべし。殊に寛永二年吉正に賜る御朱印改の文に二百廿石、高座郡円蔵郷と見えたり）、**横山重二郎**等なり。持添の新田あり〔延享二年神尾若狭守春英検知す〕 御料所なり、

○高札場三 ○小名 △二位殿谷戸（迹為止乃加比度） △和泉屋鋪 △三ツ塚 △馬場崎（以上の小名寛永七年の名寄帳にも見ゆ） △近藤中屋鋪 △岩瀬屋鋪 △岩見屋鋪 △田中屋敷 △伊予屋鋪（以上皆懐鳴権守居跡の辺にあり）

○千ノ川 茅崎（ママ）村境を流る（幅二間）

○神明社二 共に輪光寺持、一は懐鳴権守居跡にあり、屋鋪の鎮守なるべしという。

○輪光寺 天慶山地蔵院と号す。古義真言宗（茅崎（ママ）円蔵寺末）。開山天快（応永二年六月十九日卒）。**本尊地蔵**（木立像長一尺二寸、運慶作という）。また毘沙門を安置す。△觀音堂、慈覚大師の作。和泉式部守護仏なりしを後に浅草自性院に伝来し、また地頭横山氏の僕 浦井保章感得して宝永庚寅九世成翁の時

ここに納むと云、今此堂破壊して仮に客殿に安置す。○了覚庵、元の地頭大田（ママ）善太夫吉次が菩提の為に建（吉次法諡を了覚院と云 延宝八年卒 庵側に其墓碑あり）。阿弥陀を置。名主の持。○大日庵、輪光寺持。

○**懐島権守景能居跡** 景能初は大庭平太と称す。村の西方にあり。広さ七千坪、今尚構堀ありてその近き辺に馬場跡あり。また岩見屋鋪、近藤屋鋪など称するの類、彼の御家人等が住せし地ならんと土人いえり。〔東鑑〕建久六年二月九日、景能入道申文曰「以疑刑被追鎌倉中之後、枉歷三箇年早預厚免云々」。また「建仁元年三月十日、若宮大路西懐鳴平権守旧跡災」、「承元四年四月九日景能入道於相模国卒」。按ずるに、此の文によらば初め若宮大路の宅に在しを、疑を蒙りて旧里に蟄居し、恩免の後も尚旧里にありて死に至りしにや、旧里宅地は則此所なるべし。

（注記）

天正年中 一五七三〜九三年
正保の改め 正保国絵図 日本の江戸幕府が、諸大名に命じて国単位で作らせた国絵図で、これに基づき、正保日本図（日本総図）が作成された。

幕府の国絵図事業は四回行われている。正保国絵図は、二回目にあたり、全国六八ヶ国についてすべて収集され、主に軍事と交通関連の情報が記載されているほか、縮尺も二万一六〇〇分の一（一里六寸）に統一されるなど、実用性が意識されていた。（Wikipedia）

・慶長五年（一六〇〇） ・寛永二年（一六二五） ・延享二年（一七四五）